

尾島菊子の肖像

宮澤 健太郎

はじめに

「少女」とは、広辞苑では おとめ、むすめ。大宝令で17歳以上20歳以下の女子の称。とある。大宝令とは文武天皇（七〇一年）代の大宝律令の令の部分である。しかし、その時代から明治にはいつて30年代までは「少女」という概念は意識的にある年齢の女子をさしていたという例は少なく、たいていは、女、子どもの範疇に取り込まれていった、というのが実情である。

婦女子というような扱いかから「少女」なる言葉が公的にひろがっていった近代における端緒とは明治4年（一八七二）11月12日、文部大丞、田中不二麻呂が岩倉具視とともに欧米の教育制度視察のために横浜港を出た時に同じ船に乗った東京府士族、津田仙弥娘梅子9歳と5名の少女がアメリカ公使夫人に伴われての女子留学生として出発したことであった。勿論この津田こそが後に津田塾女子大学の開学者であることは言うまでもない。

このような女子の洋行に見られるように、外国から文化を吸収しようとの国家の意思と比例するような形で、日本

の田舎の少女も日本の都会にひかれていたのだ。実際にはこういった女子、詳しくわければ少女という範疇が児童文学の世界に公然と登場したのが明治30年代である。かつて「少年世界」に少女欄として設けられていた部分が、少女専用としての雑誌単体として独立したのだ。金港堂から「少女界」（明治35年4月）が、博文館から「少女世界」（明治39年9月）が、実業之日本社から「少女の友」（明治41年2月）が、次々創り出されていった。それは当然、時代の要請（少女たちからの要請）があつたということだ。つまり少女の読者が相当程度増えていたということにもなる。文学史的にはこのことは、島崎藤村の「若菜集」（明治30年8月）の影響や浪漫主義の与謝野鉄幹・晶子の短歌雑誌「明星」などの影響が年若い婦女子たちの心を揺り動かさせた結果にも違いない。

今、私たちは少女と言ふ言葉から、すぐには恋だとか恋愛を連想しないだろう。切ない願いだとか羨望、異文化への憧れを持った無性的で無垢な婦女子を真つ先に思い起こすだろう。吉屋信子にしてから真つ先にそれを題材にして書いている。そして人気を博している。

ここに一人の女流、尾島菊子なる児童文学作家がいた。なぜ彼女は吉屋のごとき名声を博せなかつたのだろうか。その点について追究してみよう。

尾島菊子とは

尾島というより小寺菊子といったほうが名が知れているかもしれないこの作家は、明治16年（一八八三）8月7日に富山市旅籠町の尾島家に生まれた。貧苦の末上京、東京府教育会教員養成所で資格をとり、小学校教師やタイピスト、記者など経験したあと作家の道を選び、当時の自然主義の第1人者、徳田秋声に師事した。その後、秋香女史の

ペンネームで次々作品を書いたが、「ほんの上ずみだけを掬ったほど」と秋声が評したように、対象把握において核心にまで立ち入れなかったようだ。貧苦の中から栄光を勝ち取っていくような一葉女史のごとき、バラドキシカルな貪欲さがなかったともいえよう。しかし、さすが秋声の弟子だけあってその点以外の情景描写、心情描写は他を寄せ付けない。そして少女主人公の立ち位置の描き方は必ずしも経済的貧苦の中にはおいてはいない。どちらかと言えば多くの作品では、一葉とは全く逆の、お嬢様の視点から少女世界が鳥瞰されるのだ。

作品は教師時代から「少女界」への投稿から始まったという。明治39年には『秋の休日』（1月）、『漁師の娘』（3月）、『妾の弟』（5月）、『みなし児』（7月）、『三人娘』（12月）などつきつきに発表。『婦人画報』にも『若き人』（明治42/4）などを発表。とくに『初奉公』（明治41/3）『少女界』（『御殿桜』（明治42/5金港堂）、『なさぬ仲』（明治44/4）『少女の友』（『綾子』（大正3/1）『少女画報』などが少女文学における代表作であるが、他にも随筆、紀行文や短篇小説をものした。が、上述したように当時の文学界のうちに寵児とはなり得なかったようだ。

しかし、明治43年『中央文壇』に掲げられた女流十傑としては水野仙子、小金井喜美子、森しげ、国木田治子、長谷川時雨、岡田八千代、永代美知代、野上弥生子、小栗とう子に、尾島菊子であった。昭和31年（一九五六）11月26日、昭和22年以来脳いっ血で病床にあった菊子は、とうとう死去、77歳であった。

少女文学への目覚め

尾島菊子が少女文学に筆を染め始めたのは明治39年、28歳のときだったと杉本邦子は言う（『日本児童文学大系6 解説、ほるぷ出版』）。しかも「少女界」という雑誌は森桂園、三島霜川らが編輯するいわゆる小波一派（硯友社）の博

文館と対峙する位置にあつたために、投稿を主としていて、そのために菊子などにも芽が出るチャンスもあつたのだ。しかも明治39年から同雑誌の御伽噺欄が少女文学欄にかわり、そこから菊子の作品が載る様になつたという幸運も重なつた。物語の内容は、酒癖の悪い父のために苦勞する母をいたわる少女のいじらしさに、とうとう父も改心して家庭も平和になるといつた陳腐な内容が当時の少女たちに受けたのである。それがいかにも作り話の御伽噺よりリアルスティックだつたのだろう。その他に継母に虐められてもそれに屈しない少女の辛抱強さと継母への敬意をはらいつづける無償の愛の結果、とうとう継母も継子の愛情を理解し、家族皆がハッピーになるといふ、およそ昔話の逆をゆくという奇想天外性も受けたのかもしれない。傲慢で威張り散らしていた父が破産し脳病になつてはじめて、父に家族への愛情が芽生え、皆が幸福になるといふ唐突な話もある。いずれの場合も、これでもかというほどに対象に無償の愛情をそそく少女像が造形され、それが読者に受けていたのだ。

菊子が少女像として持つていた自分なりのイメージは次のようだ。

想像に宿つた少女もあれば、実際モデルがあつて書いた少女もあります。けれども大方は可愛想なのばかりでした。憎らしい少女はあんまり書きません。少女は何処までも無邪気で、天真爛漫花のやうなのがよろしうございます。少女の嫌に大人ぶつた、高慢ちきなのは憎いものです。況して母様に理屈のひとつも言はつとするやうな少女など、末恐ろしうございます。女は女らしきが中にも、殊更少女は花の蕾ですから、蕾らしうしほらしきこそ好かれ、愛らしい蕾の口から人の悪口言ふたり、大人の欠点（あら）など見出す少女は大嫌ひです。ですから私は私の理想の少女——心の優しい、女らしい少女をいろいろと書いて見ました。私は早く親に別れた少女だの、継継（ま

ま) しい母様に仕える少女、又は貧のために苦勞する憐れな少女など、凡て欠陥のある不幸な少女に心から同情します。然うして遂に少女小説と言ふものを書いたのです。

『困難と戦ひし十年間』(『少女界』明44/5 前述杉本の解説より)

つまり菊子の少女は吉屋のエキゾチズムとかロマンチズムを夢見る少女像どころか菊子自身の脳の極北にねむるいかにも嘘のような純朴な少女、賢治でいえば木偶の坊ないし山男に対比される汚れないそんな理想的存在を夢想から作物として造形したのだ。

師である秋声が菊子の人柄や作品に「深酷味がない」「美しき人生」(大正14/7、秋声序文)といったのはこういった菊子の一途な純朴性にあきれた発言なのかもしれない。文章もうまいし、情景描写もそこそこだが、一葉のような作物の上でのしたたかさや深刻性がない、それが菊子の欠陥だったのかもしれないし、それが一面での特徴でもあるだろう。上に掲げたいくつかの代表作について論評してみよう。

A. 苦勞話系……献身と改心

『初奉公』(『少女界』明治41/3)

菊子の少女像年齢は低い。この作品の主人公加代子は孤児で、まだ12歳だ。田舎から女中奉公人として出京して、立派な屋敷に奉公し、苦勞する。当時としては田舎の少女、とくに富裕層以外の少女は都会の富裕層の家に住み込んで行儀見習いや子守りをするということとはよく行なわれていた。ここに登場する富裕家庭の勝江さんははじめか

ら加代子を邪慳に扱うがその母親が勝江の我が儘を諫め加代子の境遇に同情するようにしむける事によって、急に優しい御嬢様となつて加代子に優しく接する様になる。悪役の勝江が善人になつてしまふところが、リアリズムびいきには解せないところだが、一心に尽くし、一方でそれを改心によつて理解する善意のサーキット、この辺りが菊子の人気の秘密でもあるのだらう。

『御殿桜』（金港堂、明治42/5）

日清、日露戦争後の成金、徳丸某の品川御殿山の邸内に育つた雛江は14歳の御嬢様だ。華やかな園遊会ではお友達も来てくれたのだが、母のいない雛江はないてばかり。雛江は弟、晋もろとも学習院に通うエリートである。実は、母親は水野子爵の出身でやはりお嬢様の出だが、胸を病み入院中だ。父親は母親の病気がうつらないように二人を病院に行かせないし、会わそうともしない。おまけに父は変な叔母さまを屋敷に住ませたりとやりたい放題でいつてもらう。が、そこには母はすでにいなくて房州に移されてしまつていた。弟は東京につれ戻されるが、雛江は心労からか倒れてしまふ。鎌倉で琴やヴァイオリンを弾いて日を過ごしているうちに、父は事業に失敗して行方しれずになつた事を知る。そんなとき昔から雛江を大事にしてくれてなついていた女中、春が兄弟を迎えに来る。付いて行つてみると大森あたりのしもた屋で、事業失敗のため脳病になつた父を看病する母と再会をはたす。親子4人はここで邂逅、仕合せな生活を見つけていく。

ここでも少女の献身的な愛が母親と父親へ示され、一方で娘に意地悪くしていた父親が病気になつて、父親自身

の改心の結果、物語はハッピーな終わり方をみつけてゆくのだ。成金主義への、菊子ならではの抵抗作品と見て良
いが父親の徹底的な懺悔はここにはない。

『なざぬ仲』(「少女の友」明治44/4:9)

昔話の継母もののパロディといってよい物語だろう。少女、高子は実の母と父の離婚によって父方に籍を置く女
生徒である。「少女の友」を愛読する少女でもあった。父の元に義理の母が来て、貞子という妹を生んだことから、
父がいない時など、高子は義理の母から悉く冷たい仕打ちを受けていた。高子にはかつて兄がいて、小さいときに
死んでしまっていた。いつもその兄のことを懐かしむ高子であった。義母からいつも邪慳にされ、よかれと思って
した事も、義母から叱責をかう高子はそれでも我慢して自分が至らないからだと謝り続けた。父親は高子を愛して
くれていたが、却って、そのことがもとで怒って義母は貞子を連れて田舎にかえってしまう。それもこれもぜんぶ
自分が悪いんだと心を痛めた高子は一人で義母の居る田舎に出かける。そして義母にあやまろうと思っていた。田
舎につくと義理の母はなんと病気になって寝ていた。そこで高子はあやまり、献身的に看病した。その献身的愛をやっ
とわかつてくれた義母は、「高ちゃんの其美しい優しい神様のやうな心を生涯わすれません」と以後高子を貞子同
様に愛して、一緒に東京にもどり家族四人仲良く暮らす事になった。忍耐と謙讓そして優しい心をもった少女。こ
れこそが当時少女達に求めた美德なのではなかったかと、杉本氏は(同解説)述べている。少女の善意とそれに応
える義母の改心、現実にはまずありえないこのアポリアを、菊子の献身的愛は可能にするのだ。それが菊子の文学
のマジックだといってもよいだろう。

『綾子』(『少女画報』大正3/1)7 『紅ほづき』大3/2、東京社)

高等小学に通う綾子はいつか東京に出て女学校に行きたいと願う生徒だった。ともだちの絹江も松子もだが、それを願わない生徒は殆どいなかった。しかし、北陸の港町に住むほとんどの親は娘の東京での生活や学問などは思いもしない。「新しい(東京の)空気にふれることなしに暮らすと言ふ事は決して幸福でない」と考える綾子に対して祖母は絶対にそれを赦さない。しかし、仲良しの松子や絹江の上京は綾子に大きな衝撃を与え、自分も家出をして東京に行くこととするが、途中で連れ戻されてしまう。暑中休暇で東京から帰省した絹江とも心が離れてしまつて泣くばかりの綾子。そして最後の部分はこのように締めくくられる。

「私にはもう友達なんて、一人もなくなつたのだ。」

綾子さんは寂しげに呟いて、うしろの川の縁を一人で散歩してゐました。都会に出て学問する二人は吃度幸福であるか、それとも、このまま無事にこうしてゐる自分の方が幸福であるか、それは無論わからないことだと、さう思つて歩いてをりました。

向学心というより、少女達の抱く東京の「派手な着物の長い袖や、踵の細いハイカラな靴や、幅のひろいリボンや、珍しい髪の結びぶりや、そんなものがひとつひとつ」が少女の心をいちいち震わすのだ。菊子はここでは読者をおもんばかつてか、綾子の東京行きをペンディングにした。これまでの菊子の構成法だと、父親ないし母親の働

きかけで祖母の改心があつて、当然綾子のハッピーエンドが用意されたはずである、がえて作者はそうはしなかつたのだ。それは菊子自身のリアリズムから来る当然の帰結であつたのだらう。そして、実に菊子の作品にはこの系統の作品つまり女学校進学を諦める決断を強いられる作品系列がいくつかあるのだ。(例えば『姉と弟』『少女界』明41/6、『都の夢』『少女界』同年/10、『ちいさな悶』『少女の友』明44/3など 杉本前解説)

ではこのような少女像の構築されるに至つた経過を推論してみよう。

少女の成立

『女学雑誌』の巖本善治が明治20年代「home」の訳語が日本にはなく、模索していた頃、妻の若松賤子がこの訳語としてはじめて「家庭」と訳したと岩見照代(『ヒロインたちの百年』学藝書林二〇〇八/6)は記している。その書の中には思わぬヒントがありそうだ。ここでは賤子が「小公子」の翻訳にあたって、子どもと家庭とがクローズアップされたその際、子どもの教育や母子関係が見直され、そこでは愛の巢としての家庭と、そこにはまる様に形成された家事労働と消費に従事する婦女子の予備軍、つまり少女たちの群像が予想される。このように困り込まれた少女たちは、いつかその位置に不満を抱く様になる。なんでもやろうとすれば出来る男性や少年への羨望、なにも自分から動かせない少女たち、これこそが明治期の娘たちを揺り動かした原動力だ。しかも好奇的娼婦的女性を拒否した別個体としての存在、それが少女そのものであつたらう。こういった少女たちの夢が向つた東京というトポスや女学校とは、対話・女紅・踏舞などが主流であつた。対話とは英語、フランス語、ドイツ語、支那語などの語学部門の積極的摂取である。一八八一年に神田に設立された学校(白百合女子大の母体)もこの趣旨であつた(尚、白百合は後に一

八九八年に高等女子仏英和学校になり、一九三五年白百合高等女学校に、一九四六年には白百合女子専門学校に、一九五〇年には白百合短期大学に、一九六五年には四年制の女子大学となった。津田塾やフェリスなどもそうだ。また女紅とは裁縫のこと。大妻女子大や実践女子大の原型がそれにあたる。踏舞は字の通り舞踏のことだ。学校ではないが鹿鳴館などがそうだ。その他、語学習得のために留学させたり、外人教師を招いたり、語学主体の学校やミッションスクールの次々の設立などにその影を見る事が出来よう。賢治の例でいえば盛岡中学の英語教師にプロテスタント牧師のタッピングを依頼したのもその流れだろう。西洋的趣味、異国情緒、エキゾチシズムなどに傾倒していったのは、やはり少女たちが主流ではなかったか。そして、これらの枠から必然的にはみ出して開花していったのが若松賤子、平塚らいてう、佐藤俊子らの活動をはじめとした女権拡張の運動ではなかったか。そして当時、男たちがたむろしたカフェにおける女給の和服は娼婦性を、その上に付けていたフリルなどの付いたエプロンは少女性の現れではなかったか。そうする事によってのみ女性性は少女のころの夢を保持留保して現実に対峙できたのだ、と岩見は言う。

少女物語の空間背景

少女が存在として社会の中に位置づけられる背景として上にのべたような「家庭」の存在と女性の「家庭」のなか
に占める位置の拡大がある。婦女子の役割は子どもへの躰けと自らの修養であった。明治20年代に「家庭」における
主たる婦女子つまり「主婦」(この言葉は早くは明治7年に使われたと言つ。…前述岩見による)という言葉も生まれ、
都市中間生活者層の家にはどこにも女中、子守り、下女がいて家事・育児は主婦の仕事から外れていた。この子守り・
女中・下女たちの出身は一樣に田舎か貧困層であった。従つて資本主義のさらなる発展のうちに、これらの家庭労働

者たちを外部の産業へと移らせていったという状況の中で、女中や下女は次第に中流家庭から姿を消していったのは当然の成り行きであった。その結果家事全般をこなす主婦が増大し、家庭に入り込む少女たちは消え、その結果として少女たちの女学校や専門学校等への進学が増加する中で少女への躰けと修養が強調されていったのである。このようにこの時代にのみ見られた家庭での特異現象故の少女たちの葛藤が菊子の物語空間を形成していて、そこにこそ、少女の羨望があつたりしたわけである。少女、否女性の権利の獲得拡大の出発点はこのような少女の存在から始まつたといつても過言ではあるまい。

おわりに

尾島菊子の作品が明治20年代に次第に形を調べて来た近代家族、あるいは家庭の一現象として少女を扱ひ、その羨望と苦惱、さらには江戸期からの勸善懲惡的戯作（改心とハッピーエンド）の路線の上を走つて人気を博したのは、大勢の同じ思いの少女たちとシンパたちが思いを遂げられずに菊子の描く少女に思い入れをしたからである、というのは簡単だ。それにもかかわらず菊子の作品が吉屋信子ほど後世に残らなかつた理由とはなんだつたのだろう。先ず一つ目は、現実として姑の悪はそう簡単に直らないということをリアリズムのなかで読者が知つてしまつた事があげられよう。改心が行なわれるくらいの大偉大な愛を信ずる事が出来なくなつた時代とも言えようか（たとえば漱石が『虞美人草』の中で勸善懲惡をやつてみせて人気を博したことは有名だが、以後漱石はおなじような勸善懲惡的作品は書かなかつたことの意味を考えてみる必要があるだろう）。二つ目は、時代も家庭事情も変わつてゆく中で下女子守りの減少と不在による理解不能ということだ。作品が時代を超えていく時に同時代の事象の記号が消えてしまつ

のはある意味致命的だろう。時代の波を越えるうちに、読者から子守りのおかれた真の意味だとか事情が不明になって来てしまったのだ。それこそ作品の意味における最大の危機ではなからうか。ここで吉屋信子のエキゾチシズム、異国情緒への憧れだけが時代を超えた少女達の中でいきいきして行くことは明白であろう。単純な分だけ分かりやすいし、共有できる部分も大きい。複雑な特殊な少女の感情はいまさら不要だし、却って邪魔臭い代物に成り下がってしまったのだともいえるだろう。かくして、菊子の物語は信子の物語より複雑で特殊という理由だけで少女読者の更には文学史の紙面からもつすれてしまったように思われるのだ。(2009・8・14)

* 参考文献 岩見照代 「ヒロインたちの百年」(學藝書林 二〇〇八/6)

